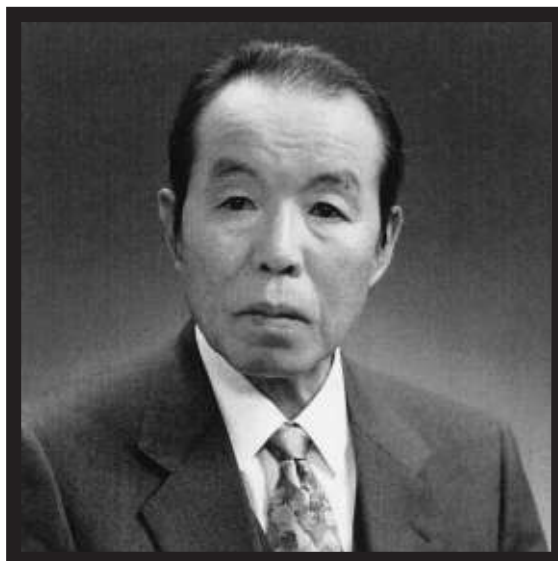


# 追 悼



故 飯高和成先生 略歴  
(1930年11月3日生—2006年3月30日没)

### <学歴・職歴>

昭和30年 日本大学医学部卒業  
 昭和31年 国立東京第二病院, 医学実地修練終了  
 日本大学医学部助手, 病理学教室勤務  
 昭和32年 医師免許取得(No. 159989)  
 昭和35年 医学博士学位取得(日本大学・第 688 号)  
 昭和37年 日本大学専任講師, 医学部勤務  
 昭和39年 日本大学助教授, 医学部勤務  
 米国 Milwaukee 州立病院  
 research fellow として留学  
 (主任 Dr. P. Kimmelstiel)  
 昭和41年 米国 Oklahoma 州立大学  
 research fellow として留学  
 (主任 Dr. P. Kimmelstiel)  
 昭和42年 日本大学医学部復職  
 昭和48年 獨協医科大学第二病理学教授  
 昭和51年 獨協医科大学病院病理部長兼務  
 昭和63年 獨協医科大学基礎医学科長  
 (平成 4 年 3 月まで)  
 平成 7 年 国際医療福祉大学病理学教授併任  
 平成 8 年 獨協医科大学第二病理学教授退任  
 獨協医科大学名誉教授  
 平成13年 国際医療福祉大学病理学教授退任

昭和49年 厚生省特定疾患調査研究班班員  
(平成 2 年度まで)  
 昭和58年 厚生省特定疾患調査研究班幹事  
(昭和 60 年度まで)  
 日本腎臓学会理事  
 昭和50年 臨床検査技師試験委員(厚生省)  
(昭和 56 年まで)  
 昭和53年 日本臨床病理同学院病理部幹事  
 昭和54年 第 1 回アジア太平洋腎臓会議プログラム委員会委員  
 昭和60年 厚生省心身障害研究班班員(平成元年度まで)  
 昭和63年 第 18 回日本腎臓学会東部部会長  
 平成元年 糖尿病性腎症日米合同会議 日本側委員  
 国際小児腎臓病学会会員  
 東京病理集談会幹事(平成 3 年まで)  
 平成 2 年 第 11 回国際腎臓学会議組織委員会委員  
 同プログラム委員会委員  
 平成 6 年 社団法人日本腎臓学会理事  
 社団法人日本腎臓学会学術評議員  
 社団法人日本腎臓学会評議員  
 平成 8 年 社団法人日本腎臓学会功労会員  
 平成13年 社団法人日本腎臓学会名誉会員

### <学会活動など>

昭和37年 日本腎臓学会評議員  
 昭和40年 日本病理学会評議員  
 昭和41年 国際腎臓学会会員  
 昭和48年 国際病理アカデミー会員

### <表彰>

昭和54年 臨床病理学会・臨床病理同学院感謝表彰  
 昭和61年 腎研究会学術賞受賞(財団法人腎研究会)  
 (巣状糸球体硬化症を中心とした腎内循環動態に関する研究に対し)

## 飯高和成先生を偲んで

獨協医科大学越谷病院病理部

上田善彦

日本腎臓学会名誉会員，獨協医科大学名誉教授飯高和成先生は，平成18年3月30日午後9時多臓器不全にてご逝去されました(享年76)。先生は，平成16年7月に嚥下障害の症状から下咽頭癌が発見され，その後放射線治療や6回の化学療法などを受け，加療を続けてこられました。入退院を繰り返されたこの約1年半，ご家族一緒に旅行に出かけられたこともありましたが，ご家族の献身的な看護の下で闘病生活を送られてきました後の旅立ちでした。

先生は，昭和30年に日本大学医学部をご卒業され，その後竹内正教授主宰の病理学教室に入局し，病理解剖，外科病理，生検病理などの幅広い診断業務を研鑽されました。教室では医局長，その後講師として多数在籍する病理医をまとめ，後輩たちの指導を的確かつ丁寧にされておられたと聞いております。

研究面では，腎臓グループの指導者として腎炎を中心とする研究発表や論文の指導などをされ，多くの業績を上げられました。当時の腎臓グループには，松尾英一先生(元 杏林大学病理学教授)，森吉臣先生(元 獨協医科大学越谷病院病理部教授)がおられ，心臓グループには桜井勇先生(元 日本大学病理学教授，元 医学部長)，神経グループには赤井契一郎先生(元 杏林大学病理学教授)，橋本重夫先生(元 近畿大学病理学教授)，小林慎雄先生(現 東京女子医科大学病理学教授)などがおられました。各グループが切磋琢磨し，現在の日本大学医学部病理学講座(現 根本則道教授)の伝統を形成してこられました。

さらに昭和39年に助教授就任後，米国，ミルウォーキー州立病院，オクラホマ州立大学へ research fellow として3年間留学され，Dr. Kimmelstielのもとで糸球体腎炎の生検診断を多数経験され，特に糖尿病性腎糸球体硬化症の電顕を用いた画像解析による研究で大きな成果をあげられました。留学時には，大澤源吾先生(元 川崎医科大学腎臓内科教授)や荒川正明先生(元 新潟大学第2内科教授，元 新潟大学学長)とともに腎臓病理に没頭されたように聞いております。帰国後は日本での移植腎における診断と最先端の研究業績を数多く残されています。昭和47年には，獨協医科大学開学の準備委員として参加され，昭和48年に獨協医科大学第2病理学教室教授として赴任(五月女茂助教授とともに)されました。第1期生から学生教育にも熱心に取り組まれ，課外授業として病理ゼミを行い，mini CPCなどを教室スタッフと学生で行い，腎臓生検の見方，腎疾患の分類や病態の考え方などを積極的に指導されておりました。学内腎臓カンファレンスには，循環器内科の先生方(八木繁教授はじめ多数の先生方)はもとより，木村健二郎先生(現 聖マリアンナ医科大学腎臓高血圧内科教授)や岩手医科大学の病理医ならびに泌尿器科の先生方なども参加されておりました。1期生が先生を慕って，病理学教室の年間入局者数としては非常に多い4名が入局し，3名が現在も病理医を続けております。その後も卒業生が多数入局し，今も多くが病理医として活躍しているのは飯高先生のお人柄と熱心な教育の成果と思われれます。また，先生は人との出会いをととても大切にされ，学内外から多くの研究者を受け入れ，研究指導・教育をされるとともに知識の共有を図られました。巣状糸球体硬化症を中心に生検例や動物実験を用いた多くの業績を国内外に残され，現在も病理学教室(現 藤盛孝博教授)の伝統は引き継がれ，研究領域の幅は腎臓と消化器に広がり，多くの同門の先生が活躍しております。

先生が在籍された獨協医科大学の23年間には、基礎医学科長、学園評議員、大学院研究科委員長などの役職に就かれ、学会関係では、日本腎臓学会理事、第18回日本腎臓学会東部部会長などの要職を歴任され、腎研究会学術賞などを受賞されております。また、厚生省特定疾患調査研究班の班員ならびに幹事として、長い間ご活躍されました。

闘病中に物にされたデジカメで秘蔵の東洋蘭や壬生周辺を写され楽しまれたりしたようですが、ご自分の病気に関しては淡々とお話をされ、われわれに何ひとつ愚痴を言わず、じっと病気に立ち向かっておられました。この精神的な強さは、ご家族の深い愛情と先生の親友でありました勝呂長先生(板橋区医師会病院名誉院長)の存在が大きな支えであったと思います。

平成13年に国際医療福祉大学を退任され、これからはご家族とゆっくりと過ごしていただきたいと思っていたところでした。先生は、水泳の名手で、学生時代にはヨット部に所属して活躍され、インターン時代には穂高岳や槍ヶ岳に何度も挑戦されるなど青春を謳歌された、とお聞きしていましたが、病には勝てませんでした。まことに無念でなりません。

残された獨協医科大学病理学第二講座(現人体分子)同門の私どもは、先生の教えを忘れず、教室の伝統と更なる発展のために日々の教育・業務・研究に更なる努力をしなければならないと思っております。どうかわれわれを見守っていただきたいと思っております。

心から先生のご冥福をお祈り申し上げます。